

歴史言語学

Historical Linguistics in Japan

2019年12月 第8号



ごあいさつ

日本歴史言語学会副会長

田口 善久

ここに『歴史言語学』第8号をお届けします。本号には、イタリア語における特定の動詞表現が示す構造的位置づけの歴史的变化に関する研究論文と、2018年大会における公開シンポ「認知と歴史言語学: 文文化・構文化と認知の関係性」に対する趣旨説明ならびに四本の基調講演概要が収められています。ご寄稿くださった方々ならびに編集委員会の方々のご尽力に心からの感謝を申します。

菊澤律子会長とともに執行部として理事会の仕事に携わって2年が過ぎました。この2年間の理事会の業績には大きなものはありませんが、本学会の大会にシンポジウム開催を盛り込んだこと、学会運営の簡素化を図ったことをささやかな成果としてご報告させていただきたいと思います。前者については、「学界の潮流」というものを、リアルタイムでかつ当事者の口から直接会員にお届けすることが学会の重要な任務のひとつであると考えたからです。2017年の大会では「系統樹」をキーワードに近年リバイバルした系統研究を取り上げ、2018年大会では本号に要旨が掲載されている文法化研究をクローズアップしました。今後も、そのときどきの理事会が「熱い」と感じている話題を取り上げて会員に届けていってほしいと願っています。

後者の点については、学会の持続可能性を高める試みということです。本学会は、小さな学会ではありますが、立ち上げ時に活躍された先生方の高い能力に支えられて私たちの代まで来ておりました。今後の理事会の運営が、そのような能力に恵まれなくても続けていけるよう、ウェブサイトの運営の外部委託、会計処理の簡素化などに努力しました。

最後になりましたが、会員の皆様のご支持に深く深く感謝します。今後とも「時とともに姿を変えることば」を皆様とともに見つめていきたいと思います。引き続き、本学会にお力添えをいただけますよう心からお願いいたします。

2019年12月17日

於 千葉

『歴史言語学』
Historical Linguistics in Japan

第8号

目次 / Contents

ごあいさつ	田口 善久	i		
目次		iii		
前号目次		iv		
研究論文				
イタリア語繰り上げ動詞・非対格動詞における基底構造の通時的変化: 小節構造分析における再述接語と虚辞代名詞			上野 貴史	1 - 40
書評				
福井 玲 著『韓国語音韻史の探求』	伊藤 英人	41 - 46		
特集: シンポ '18 「認知と歴史言語学: 文法化・構文化と認知の関係性」				
趣旨説明	中村 芳久	47 - 48		
英語受益者構文の拡大をめぐる	米倉 よう子	49 - 66		
英語における祈願文の発生と発達	堀田 隆一	67 - 80		
日本語の主要部内在型関係節の発達について	野村 益寛	81 - 89		
認知からの要請としての文法化・構文化: 言語類型・言語進化の認知的議論の可能性			中村 芳久	91 - 111
2018年大会 研究発表要旨		113		
会員業績 2018年9月～2019年8月 (+補遺)		121		
彙報・会計報告		129		
会則・規定		135		
投稿用レイアウト例		144		
日本歴史言語学会役員等一覧 (2019年度)		148		
日本歴史言語学会からのお知らせ		148		